

LINE——それは、こちらの世界と あちらの世界との境界線

絵本は子供のものだと思っていないだろうか？もちろん間違いとは言えない。実際、絵本の多くは子供向けに作られている。

しかし、ベストセラーになった絵本『おなかの赤ちゃんとお話ししようよ』の読者の大半は大人、しかも妊婦だった。おなかの赤ちゃんが語りかけてくるといふ風変わった絵本の著者(絵と文)が葉祥明だ。

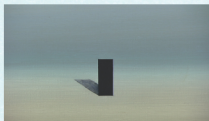
葉祥明——このユニークな絵本作家の商業デビューは70年代初頭に遡る。当時のメルヘンブームにのり、葉は一躍メルヘン画家として有名になった。

96年、葉は『地雷ではなく花をください』を発表する。この絵本の収益は対人地雷撤去のために

使われ、1冊売れるたびに10平方メートルの地雷源をクリアにできるという。葉が、大人のための絵本作家として注目されるようになったのはこの頃からだ。

一方で、メルヘン画にとどまらない活動が目立つようになった。もともと葉は、ニューヨークのアートスチューデントリーグに留学して油絵を学んだ経歴がある。その作品は北鎌倉の葉祥明美術館、そして画集『葉祥明美術館』、および同名の画ニメ(本作)で観ることができる。

2002年にはさらに故郷の熊本に葉祥明阿蘇高原絵本美術館を開き、アートと絵本のどちらも自分のルーツであることを示している。



葉の絵の特徴は、まず空と大地だ。そしてその2つを分かつ地平線。必要最低限のものが描かれてあればいい、という葉の絵は、目で見えるものというよりは心で感じるものだ。

今回の作品のテーマを尋ねると、「この現実の世界の彼方への探求心」という答えが返ってきた。彼方——それは、実存や生死を越えた永遠性を意味するのだろうか。

「地平線は私の絵の重要なテーマである。私にとって地平線は、限らない夢と憧れであるが、また、遙かな彼岸をも意味する」(葉祥明『地平線の彼方』より)

また、絵本『ジェイクのメッセージ』シリーズで、葉は、あらためて地球の大切さを語っている。ページの枠を越えてどこまでも広がらうような空や海の絵を見てると、ともすれば臆病になりそうな教育的なメッセージも、圧倒的な説得力を持って迫ってくる。

葉が絵本作家という仕事を選んだのは、最初は生活のためだったという。自分は何のために生きているのかを考える時間が欲しかったから、必要最低限の収入を得るためにフリーランスの仕事をついたのだという。

「なぜ自分は生きているのか?」という問いは、いつしか「世界のために自分は何ができるのか」、という問いになっていた。葉の精神は世界と一体化している。

スピリチュアルな問題をどう伝えるか、葉の活動はすべてがそこに辿り着く。

